平成28年度 社会福祉法人いわき会

地域密着型小規模特別養護老人ホーム

『神田の里』事業計画書

事業概要

開設年月日：平成24年4月1日

事業内容：地域密着型介護老人福祉施設（小規模特別養護老人ホーム）

事業規模：3ユニット（計29室）

開設場所：寝屋川市上神田一丁目31番1号

敷地面積：662.66㎡

建物構造：延べ床面積1,276.04㎡、重量鉄筋造4階建（耐火構造）

事業所名：小規模特別養護老人ホーム「神田の里」

目標稼働率：95%

事業目標

平成27年度に引続き地域密着型特別養護老人ホーム「神田の里」では、要介護状態にある利用者一人一人の意思及び人格を尊重し、地域密着型施設サービス計画に基づき、小規模の特性を生かした共同生活住居において、個別ケアを目指すことにより、なじみの関係を築きより家庭的な環境の下で入浴、排泄、食事等の介護その他日常生活上の世話及び生活機能訓練を行うことを目指します。

入居者の有する能力に応じた自律した生活を営むことが出来るように支援することを目標とします。利用者のニーズを把握し、ゆとりある環境の中で生活を送ってもらえるよう、生活支援者としての立場で援助を行えるように努めます。また、安全管理を最重要課題とし、職員全員で事故を防止することに努めます。

- ①要介護3以上の中重度の要介護者や認知症高齢者への取り組みを重視します。
- ②口腔・栄養管理について「入居者の口から食べる楽しみの支援の充実」を多職種によって支援します。
- ③質の高い介護サービスを確保するため、介護職員の安定的な確保を図るとともにさらなる資質向上に取り組めます。

処遇目標

地域密着特別養護老人ホーム「神田の里」では、自由で明るい雰囲気の中で、満足を感じるような生活づくりを目指すために常に利用者の精神的・身体的なニーズの把握に努め、施設での充実した生活を送るための援助を行うとともに職員教育に重点を置き介護事故・施設内感染の防止に取り組みます。

1. 健康管理及び機能訓練

利用者の有する能力を維持し、日常生活の中で無理なく生活機能訓練ができるように協力病院・医療従事者・ケアマネジャー・ケアワーカー等が連携し援助をしていくよう努めます。

2. 家族及び地域社会との交流

家族との関わりの中で処遇を考え、常に家庭との連絡調整を図るとともにボランティアの積極的な受入れなど、地域社会との交流を促進することに心がける。家族の参加や地域交流が増えるように具体的な計画を立てるよう努めます。

3. 自発性の尊重

利用者個々の自尊感情、自発性、自己決定を尊重し、画一的な処遇に陥らないようにし、馴染みの関係を構築できるように各ユニット間で処遇方法についてリーダー会議等で意見交換に取り組み援助に努めます。

4. 自律への援助

利用者個々の日常生活に対して、個人の出来ることの把握と意欲の喚起に努め ADL の維持・向上を目指します。

5. 利用者個々のニーズの把握に努め、個別の目標を設定し（ケアプラン）、積極的な援助を行う。進捗状況（モニタリング）、評価、個別目標の見直しを行います。

6. 寝たきり高齢者をつくらない、また、寝たきり高齢者に対しても個別援助計画に基づき援助を実施します。医師・看護師を含む多職種が共同し、個別援助を反映出来るケアを目指します。

処遇内容

目標の達成のために、次の内容で援助を実施します。ただし、1年間の成果や反省などを踏まえ、本年度の計画を立てます。

1. 利用開始時のオリエンテーション

利用開始時に本人及び家族の状況・利用にいたる動機等を十分把握するとともに、当事業所の性格・処遇内容等の情報を正確に提供する。

そして家族との関係がサービス利用後においても良好に継続出来るように援助に努めます。

具体的方法：家族への説明、見学、契約等

2. 日常生活の介護・援助

画一的な処遇に陥りやすい危険性があるが、入居者個々がもっている身体的・精神的能力を維持できるように努めます。

利用者ができるだけ「なじみ」のある環境で日常生活を送り、一人一人の不安に対して適切な援助を図り自律性が高まるような援助を目指します。

また、職員による創意あふれる処遇計画（ケアプラン）により様々な援助を実施に努めます。

具体的方法：アセスメントの実施、ケアプラン作成、モニタリングの実施

3. 認知症利用者の対応

認知症を有する利用者は、不安から様々な行動が現われることを念頭に置き、ユニット内や居室、食堂居間を家庭的な雰囲気にすることで落ち着いた心身状況をつくるように心がけ、計画、観察、評価、記録などを徹底に努めます。

具体的方法：カンファレンスの実施、モニタリングの実施

4. 身体拘束廃止の取り組み

身体拘束は、人権擁護の観点から問題があるだけでなく、利用者のQOLを根本から損なう危険性を有している。身体拘束により、身体機能が低下し寝たきりに繋がる恐れがある。これらを踏まえマニュアルに沿った取り組みを行い、常に必要性を確認し身体拘束ゼロを実現できるように努めます。万一身体拘束が必要になった場合は、具体的な内容を示した同意書を作成し、家族の同意を確認するものとします。

具体的方法：モニタリングの実施、カンファレンスの実施、ケアプランの作成

5. 事故防止の取り組み

事故を未然に防ぐために、業務引き継ぎの際には、職員同士で利用者の現状の情報共有を徹底します。そのためのツールとして「事故報告書」「ヒヤリハット報告書」を活用し、施設内の「事故防止委員会」において、具体的にケースカンファレンス等を行い、施設全体に周知徹底に心がけます。

また、職員研修を通して、事故防止の啓発活動に努めます。

具体的方法：ヒヤリハット報告書、事故報告書、事故防止委員会、職員研修の開催、参加

6. 医療・看護

利用者の疾病を十分に把握し、疾病から発生する様々な問題に対して医師と連携を図りながら健康維持、健康回復、疾病予防に対して援助するように努めます。

また、機能回復訓練では、利用者個々が持っている残存機能が発揮できるよう生活の中で維持できるようケアに努めます。

7. 各種行事・レクリエーション

日常生活においてレクリエーション活動は、利用者同士の連帯感、協調性を養うばかりでなく、生活に明るさと潤いをもたせる上で大きな役割を果たすことが期待できます。実施にあたっては、計画、実施、評価をし、身体的・精神的状況を充分配慮した上で利用者が自主的に簡単に参加出来るよう努めます。

具体的方法：年間行事計画、ユニット行事計画

8. 家族交流

地域密着型特別養護老人ホーム「神田の里」に入居したことによって、家族と書慣れて生活することから生じる身体的・心理的不安の解消に努めます。家族及び利用者が安心して生活出来るよう相互りかいを深め家族交流を援助していきます。些細な変化も家族に連絡・報告することに努めます。

具体的方法：面会時での情報提供、行事への参加促進

9. 栄養・給食

食事は楽しみの一つであり、自己主張・表現の出来る場として、個別のニーズが現われる時である。より個別処遇の大切さが求められる場であり、個人の習慣や食事の形態等個別性が必要と考えられる。食べる楽しさの提供、食事の雰囲気づくりに配慮し、利用者の嗜好を加味した食事提供を行えるように努めます。

また、疾病に応じた療養食にも対応できるように努めます。

具体的方法：カンファレンスの実施、嗜好調査、喫食量の調査、環境整備

10. 入浴ケア

高齢者や障がいのある利用者にも安全で安心して入浴して頂きたいと考えます。施設では、家庭で使用していたようなお風呂と機械で寝たまま入れる特殊浴があります。利用者にとって最も安全で適した入浴方法で清潔の保持ができるよう努めます。

具体的方法：利用者がより安心して頂くよう一連の入浴行為を同じ職員が
最
初から最後までお世話する。

11. 排泄ケア

高齢者や障がい・認知症のある利用者が、どのようにすれば安全・安心に排
泄
することが可能かを考え、その人に合った適切な方法を工夫することが大切で
あ
ると考えています。

具体的方法：尊厳を守る排泄ケアを提供する。

12. 防火対策

施設管理で最も重要な事項は、利用者を災害から守ることである。そのために「火災を出さない」を基本に置き、火の取り扱い及び使用後の確認に特に注意を払い防火に努める。火災に限らず、地震発生時などについても、特に夜間における避難介助の方法及び消防署との連携体制を避難訓練等の実施において、強化確率を図り、職員、利用者の防火意識の高揚に努める。防火のみならず大規模な災害に備えて食料の備蓄、必要があれば地域の災害時の拠点になるように適切な対応に努めます。

具体的方法：訓練の実施（年2回）

13. 感染症対策

地域密着型特別養護老人ホーム「神田の里」は、感染症等に対する抵抗力が弱い利用者が生活する場であり、こうした利用者が多数生活する環境は、感染が広がりやすい状況にあることを認識する必要がある。施設において感染症・食中毒を予防する体制を整備し、常日頃から対策を実施するとともに、発生時には迅速で適切な対応に努める。

具体的方法：手洗い・うがい等の実施、委員会の開催、研修の開催

14. 職員の連携

職員個々の専門性を高めることはもとより、個々のケースに対して同一の処遇が行えるように個別処遇計画に基づき、職員間の報告・連絡・相談の場として、リーダー会議やユニット会議、各種委員会の開催、さらに日常業務において情報の共有化を図るよう努める。

具体的方法：各種会議・委員会の開催、カンファレンスの開催、研修の開催

15. 職員研修

施設において介護技術はもとより知識の習得も質の向上には欠かすことのできない要因であり、施設において職場研修計画を作成し、計画的な研修を実施するよう努めます。

4月	誤薬、服薬に関する実施方法について
5月	認知症の方の対応方法
6月	夜間の緊急時の対応方法
7月	感染予防対策
8月	事故防止に関する研修
9月	排泄介助に関する研修
10月	褥瘡に関する研修
11月	介護記録に関する研修
12月	ケアプランについての研修
H29.1月	身体拘束廃止についての研修
2月	高齢者の栄養管理について
3月	人権研修

※以上の研修を実施し質の高いサービス提供に努めます。

16. 情報提供

施設において、ホームページを作成し、更新作業を本体業務に位置づけ、開かれた施設を目指します。

17. 業務の点検評価

現状の各部門の業務を随時見直し、利用者一人一人に合った生活支援を目標とし、各職員が協力し実施していくように心がけます。

具体的方法：マニュアルの見直し

18. 年間行事予定

4月	お花見（ユニットごと）
7月	七夕（ユニットごと）
8月	夏祭り（地域に連絡する）ボランティア
9月	敬老会 ボランティア

1 2月	クリスマス会
2月	節分（豆まき）
	その他、ユニットごとの行事

認知症高齢者処遇目標

今後増加が見込まれる認知症を有する利用者の処遇にあたっては、「自分らしさ」をともに考え、個々の主体性を尊重し、傾聴に心がけ継続した生活が送れることができる援助を目指します。

1. 認知症の症状の把握

利用者の有する認知症状の正確な把握に努めます。

2. 認知症利用者の治療

協力病院（寝屋川南病院）との連携を図ることにより、認知症状の悪化や進行を防ぐように努めます。

3. 認知症利用者の介護

認知症を有する利用者に対しては、その病状に合わせた介護に努め、利用者の持つ残存機能を十分に活用し、生活継続の維持に努めます。

ADL の機能低下については、脳の器質障がい、知的機能の低下、認知機能の低下、運動機能の低下のほか、注意集中の困難や意欲の低下等の心理的な理由、環境への適応障がいなどが考えられる。これらの障がいに対して十分な理解と、情報の共有を図ることにより、認知症利用者の精神的な不安が軽減されるよう努めます。

4. 行事・レクリエーション

ユニット毎に行事やレクリエーションの実施を行い、気分転換の場を作れるように努めます。また、認知症の状況や障がいの状態に合わせ、個別で参加できるレクリエーションの取り組みに努めます。

5. BPSD（周辺症状）への対応

BPSD は、脳の器質的な要因、素質上の要因、心理的、環境的要因等が複合して起こる場合が多く、アセスメントから得た情報により、慎重で冷静な対応を求められることが多いと思われる。傾聴を重視し静かな対応することに努めます。

また、家庭的な雰囲気の中で生活することにより、BPSD が軽減できるような援助に努めます。

6. 安全性・快適性・自律性の確保

- ①「安全性」という危険の無い状態は安定、安心を含んでおり、医学的・心理的
面（ソフト）と物理的環境（ハード）に配慮した援助に努めます。
- ②「快適性」とは「心地良さ」であり、生活継続の中で周囲の人々との関わり
における人的環境、穏やかな生活環境に配慮した援助に努めます。
- ③「自律性」とは利用者の生活支障の原因を取り除き、生きる意欲を引き出しな
がら、その人らしい人生が送れるように援助に努めます。